



中学校の同窓会は一度も出たことがなかった。これまで何度行われているのかも知らないし、毎回案内が来ていたかさえも知らなかった。

田舎を捨てた身なのだから、そんな集まりに参加するのは甚だ面倒だったし、行方不明と言われるくらいが心地よかった。

それでも実家を捨てたわけではなかったから長期休暇の度に実家に戻ってはいいた。しかし地元の人達に会うことはなかった。バイトをするわけでもなく、家業を手伝うこともなかった。じゃあなにしていたのかというと、気の合う別の街の予備校仲間と毎日ほつき歩いていたのである。

兄貴の車を乗り回し、オートレース場や競艇場に行き、学生の分際ながら万札を張っていた。

一人のときはパチンコ屋で時間を過ごし、小学校、中学校の同級生とは敢えて接触を断っていたわけだ。そんな秋山陽太（ヒナタ）には、田舎を捨てるそれなりの理由があった。

高校最後の夏休み。一人の女性を巡って秋山はかつての同級生数人に囲まれて暴行を受けた。

八月の終盤、同級生の女性グループが秋山の家に

立ち寄ったときのことだった。部活一本やりから解放された女子たちの日帰り旅行が終わるとき、最後の思い出づくりを考えたのだろう。

旅行の締めくくりが秋山への告白だったのだ。

女子たちは秋山を誘い出すと、さっさと解散してしまつた。取り残されたのが芹沢優月。彼女が主役というわけだ。

秋山はどうすべきか逡巡したあと、懐かしさの香る学校の芝生を思い浮かべた。彼女の家の方向に学校がある。送っていくにも都合がいい。

「学校へ行ってみないか」

「うん。懐かしいね。秋山君、夏祭りのとき浴衣着て小さな女の子たち連れてたでしょ」

「ああ、あれは隣に越して来た双子ちゃん」

学校に着いた。残暑の光に照らされた芝生の丘が見える。ヤシの木と芝生がむせ返るような緑の匂いを発していた。

裏の図書館の二階からペギー葉山の合唱がわずかに聞こえてくる。

中学の頃にタイムスリップしたようだ。

遠くの声が聞こえなくなると、心臓の鼓動が気になりだした。優月が沈黙を破るように大きく深呼吸吸

した。

「ねえ、秋山君。わたし、ずーっと思ってた」

……。次の言葉を待っていると喧ましいバイクの音がした。

二人はたちまちバイクと自転車の集団に囲まれてしまった。

それからのことは忘れようとしても消すことのできない記憶となった。

鏡に映る顔はKOされたボクサーみたいだった。鼻は漫画のようにくの字に曲がり、右目の上は青く腫れてしまった。頭突きと右肘のエルボーフックが秋山の顔を変形させた。

それから夏休みの終わるまで、秋山は一步も外に出なかった。現実の痛みは引いたけど、心の傷は全く消えなかった。優月が電話で会いたいと言ってきた。だが断り続けた。同級生からの暴行は予想以上の深い傷となって、その夏が終わった。

取り巻きの中には秋山と同じ野球部だった河野もいた。それが傷を大きくしてしまった。

あつさり倒れることで攻撃が去るのを待っていたとき、「さすが番張るだけのことはあるなあ。ざまあねえぜ」という声が聞こえた。惨めだった。校庭の土を間近かに見つめながら、頬っぺたの冷たさを味わった。

秋山が文字通り田舎を捨てた瞬間だった。

あれから五十年以上が経っていた。

六十八歳を迎えた秋山陽太が同級生に会う気になったのはなんだろうか。

案内の往復ハガキが届いたのは残暑の厳しい八月の終わりころ。まさにあの事件のあった時期だった。あいつらが参加するかも知れない同窓会なのに、出席したい気持ち湧いてきた。

実行委員長は有働紘一だった。興味をそそられた。中学のときに特別親しかったわけではないが、妙に懐かしい男だった。有働は中学三年になって成績が急激に伸びた一人だった。早熟だった秋山が伸び悩んでいるうちに、有働は急激に頭角を現したのだ。

小学校では全く目立たなかったし、中学に入学したころも活発な方ではなかった。一方秋山自身は中学一年までは何でもトップを走る中心的存在であった。それがいつの間にか成績は逆転し、高校受験では秋山の方が辛酸をなめた。

その後、有働は県下有数の進学校に入学し、一方の秋山は県外の私立高校に入学したのである。それは故郷を疎遠にする第一のキッカケになったかも知れない。

そんな秋山は、故郷から千キロも離れた北の大学

を選び、異国情緒を満喫した。

就活のころには故郷より北の地が大事になっていた。それでも断腸の思いで北国の青春を断ち切って、東京での生活を選んだ。

内定をもらった三社の中で最も小さな無名の企業に入社した。大学の教授の紹介でもあり、その会社の経営者が北海道の出身だったのが大きかった。

青春を謳歌した北海道に強い郷愁を抱いていた秋山らしい選択だったかも知れない。

それが転勤というサラリーマン特有の宿命により、秋山の状況が一変してしまった。

移動先は関西支店だった。着任したその日、新しい同僚たちの醸し出す雰囲気胃袋を締め付けた。文化の違いがこれまでの人生を全否定している感覚だった。人懐っこい関西の人たちがものすごく遠く感じて、自分だけが重い鎧兜を身に着けている感覚なのだ。味方が誰一人いない。孤独だった。関西の人たちの距離感に身の竦む感じがした。

週末、傷心した自分を慰めるつもりで大好きな京都を歩いてみたが、癒されることはなかった。関西で働き続けるのは無理だった。

こんな挫折がやって来るなんて、予想だにしない

った。下着同然で市場にやって来る関西のおばちゃんを見てため息をつき、自転車が不揃いに並ぶ商店街に目を背け、カウンターに並ぶお皿や小鉢を選ぶランチのシステムが馴染めなかった。秋山は益々孤立していった。

東京では感じなかった混沌。良くも悪くも装う文化の東京と違い、本音がストレートに伝わる生活感が直接神経を刺激した。洗練された北国の街並みやチーズやバターの香りにはすぐ馴染めたのに、関西では同化する自分を見つけることができなかった。

高校受験で故郷に見切りをつけ、転勤で関西に挫折し、失意のどん底で東京に戻ってきた。

道のりは長くもあり短くもあった。

同窓会のハガキが手元にある。

五十年も経てば、みんな大きく変化していることだろう。それぞれの違った人生を覗いてみたい。地元を離れることのなかった同級生も、東京で活躍している同級生も会って話してみたいと思うのだった。ハガキを受け取ってから、これまでの人生が妙にフラッシュバックした。

三十にして西の地に敗れ、東京に戻ったとき、日航機が墜落した。会社を辞めて次の就職先を探すこともなく、失意の心を癒しているときだった。

関西を引きはらうとき、妻を呼ばなくて良かったとつくづく実感した。妻がもし飛行機を使っていたらと想像すると、鳥肌が立った。余りにも残酷な光景が秋山に焦りをもたらした。真夏のにうすら寒い感覚が襲った。

のんびりしている場合ではない。早く職を見つけなければ。妻の人生も背負っているのだから、もう怠けている時間はない。子供がいない二人だけの気楽さに檄を飛ばさなくてはならない。妻の母親も闘病生活を余儀なくされている。一刻も猶予はないと思った。

しかし何処も彼処もお盆休み真っ只中である。焦った。新聞の募集欄を必死に追いかけた。折込み広告の募集欄も穴が開くほど見つめた。転職情報会社に接触するか迷いつつ、辞めたばかりの会社の上司にも相談した。

盆明け、継る思いで元上司の課長に会った。そして取引先に随行した。オフィスでの面接を終えたあと、銀座での会食は足が宙に浮いていた。

紹介してくれた課長には申し訳ないが、自分には馴染めない。何かが違っている。肌が合わない感覚……直感が紹介先を拒絶していた。

旧知の縁を頼るのはもうやめよう。変なしがらみにとらわれては自由な判断を失いかねない。自力で

探すしかない。

それからは企業紹介会社を頼りに何社か訪問した。その中で自分のキャリアを評価してくれるところが出現した。

外資系だった。オフィスには十人に満たない社員が働いている。服装もどことなくあか抜けていた。日本企業の規律性や同一性からは逸脱している。テレックスのカタカタと鳴る音が心の底をざわつかせた。英語の電話応対も聞こえる。

面接で英語は苦手だと正直に伝えた。

社長は「あなたのキャリアを買っているのですから、英語力は気にする必要はありませんよ」と言ってくれた。入社して時間が経てば自然に語学力なんて身につくとも。別の語学を学んだ経験も活かせるはずだと背中を押してくれた。

呆気なく決まった。給与面でも満足できる額を提示された。

神谷町のオフィスは、これまで通い慣れた路線を使ったので便利だった。何年後かには妻の母を面倒看するために引越す必要がある。方向は反対だが通勤時間は短くなるはずだ。

何もかも好都合にみえた。しかし甘かった。関西で受けたダメージが精神を弱体化させていたのだろうか。新しい仲間たちとランチに行くと、飛び交う会話に違和感があった。クルージングに出かけた話

やコンサートで盛り上がった話をされるとついでにけない。住む世界が違った。

オフィスに戻ると、テレックスの音さえ胃袋を打撃した。トイレに駆け込んで食べたばかりのランチを吐き出した。

それから二日間悩んだ末の通勤五日目、上司に伝えた。辞表を書かなければならないほど勤めていなかったし、入社での正式契約があつたわけでもない。

上司は営業メンバーを呼んで話し合いの場を作ってくれた。入社して日の浅い先輩二人が自分の経験話を話して説得してくれた。上司は「君は機械部品のことを彼らより理解している。油圧装置のことも詳しい。そこを評価しているのだから、英語力が足りなくても問題ないよ。社長が明後日には戻ってくる。その時にもう一度話し合おう」

その場は一先ず引き下がった。

週末、妻に外資系の会社は馴染めないと伝えた。自分で一旦は入社を決めておきながら、これから何十年も苦痛と闘いながら我慢するなんて無理だった……。もつと慎重に決めるべきだ。焦って妥協した結果、何年後かに後悔するのが臉に浮かんた。初めての転職より、次の転職はもつと厳しくなるはずだ。年齢的にも、転職回数も数字が大きくなればハンデキヤップが重くなる。

ここは焦る心を静め、まずは海外から戻ってくる

社長に詫びることから再スタートだ。

週明け、入社を辞退するため、少し早めに出勤した。私物はなく、デスクの中には与えられた文房具や社則があるのみだ。持参した雑巾を絞って電話や机の上を拭いた。

モーニングコーヒーを終えた部長が入ってきた。

「おはよう秋山君」

「おはようございます」

「その感じは決断してしまったということかな」

「すみません。やはり、迷惑をおかけしたくなくて入社を辞退させていただきます」

「そっかあ。一期一会をビビッと感じていたんだけどなあ」

外資系バリバリの風貌に似合わない古風な言葉が、ずしんと来た。

女性スタッフや先輩営業マンが出社してきた。軽い挨拶が飛び交ったが、乾いた声の響きが秋山の決断を察しているようだった。

そして九時ちょうどに社長がやって来た。

「おはよう。秋山君、こつちで話そうか」

社長は専用応接室を指し示した。

「お時間を割いていただいて申し訳ございません」

事情を聞いていた社長は全てを察したうえで、説得の余地があるか最終確認するつもりなのだ。

「転職紹介会社には入社を辞退されたと仰っていただけませんか」

「入社した事実があると我が社が成功報酬を支払うことになるから、それを避けたいと」

「こんな我儘を見せつけられたうえに、入社報酬を支払わなければならないのは、不本意です。入社しなかったことにしていただけませんか」

「そんな気遣いは必要ないけどね。そこまで気を回すのであれば、一か月でも頑張ってみてはどう」

「多分無理だと思います。この違和感は時間が経っても変わらない気がするのです。判断を先送りしても結果は同じだと感じています」

「案外、その違和感は時間が解決してくれるかも知れないよ」

「少し異質かも知れませんが、関西の環境に馴染めなかったのと同じ轍を踏むような気がするのです」

「繊細なんだね。外資系には合わないかあ。過去には一日で見切りをつけたのもいるからね。別に君が特別とも思わないけど」

「すみません。短い間でしたがお世話になりました。勉強になりました」

「翻意することがないようですから、引き留めるのは諦めましょう。勤務日数分のサラリーはお支払いします」

「それは結構です。入社していないことにしていた

「だきたいので、報酬を頂戴する理由がありません」

今後の活躍を期待すると励まされ応接室を出た。状況を察した同僚たちの目が冷たかった。

神谷町の駅周辺には入り易いカフェもない。街に受け入れられていない感覚があった。馴染みのない街なのだ。第9毛利ビルを後にして地下鉄の階段を下った。

同窓会幹事の有働君はどんな会社にしたのだろう。一つの会社を勤め上げたのだろうか。

バリシヨイ・カメラの副社長にまでなった田嶋君は今出席するのだろうか。

県警のノンキャリアトップにまでなったという大林君はもう悠々自適なんだろうな。

もつとも顔を合わせたくないあいつらはまさか出席しないだろう。いや、出てくるかも知れないなあ。じゃあ、参加するのは辞めようか。

出欠の締め切りは九月二十日か。

秋山は一月悪戦苦闘した末に、新聞広告で探した八丁堀の会社に転職した。新卒入社した機械メーカーとは歩いて行ける近さだ。日比谷線で一駅しか変わらない。安易だが実はこれが最大の決め手だったかも知れない。それと面接してくれた社長が非常に穏やかにみえたのも大きかった。

その社長は読書家で、書庫には様々な分野の書籍が所狭しと並んでいた。デスクにも経済誌やハウ

ツー本、歴史小説などが乱雑に積みあがっている。

『レーニンの国家と革命』があるのには驚いた。秋山の履歴書を見てのことだろう。

面接でレーニンの質問はしてこなかったが、好きな作家を聞かれた。吉本隆明を書棚で見つけた秋山は、一瞬大学の先輩を思い浮かべたが、結局無難な回答を選んでいった。

それから秋山はこの会社で順調にキャリアを積んでいった。三十で入社して五年後には新卒で入社した同世代に追いついた。更に一年後には同世代を追い抜いて課長代理一番乗りとなった。

そのころ社長は自分の息子を専務取締役とし、自らは実質の経営から身を引いて、幹部候補を育てることに専念した。秋山はその選抜幹部候補に抜擢された。

新卒で実績を積んできた先輩の中には嫉妬を露わにする連中もいたが、秋山自身は全く気にしなかった。

先輩たちを黙らせるだけの実績を積み上げ、二十五年後遂に取締役を拝命するに至った。

しかし、世代の近い専務は気に入らなかったらしい。

自分の父親の寵愛を受けている秋山のことを目障りになりだしたのだ。

勇退して最高顧問になっていた先代の病死をきっかけに秋山は疎まれるようになった。

役員改選の時期がやって来た。秋山は先輩常務と一緒に呼び出された。

昭和通りの割烹料理店に十五分前に入ると、既に社長は身構えていた。秋山は退任勧告を直感した。そして秋山の直感は当たっていた。

「酒が入る前に申し上げておきます。松井常務、規定により勇退していただきます。ご苦労さんでした。株主総会以降は理事として、会社を引き続き盛り立てて下さい。そして秋山君もご苦労さんでした。ご自身は最低でももう一期と思つていたでしょうが、退任していただきます。青天の霹靂といたところでしょうが、それだけの理由があるのです」

社長の言葉は遠くに聞こえた。それなりの理由を並べ立てているが、ほとんど他人事のようにしか聞こえてこなかった。これってもしかしたら嫉妬じゃないか。なんで秘書のことが問題なのだ。台風で立ち往生した彼女を迎えに行ったのがそんなにいけないことなのか。それが退任の理由か。

秋山は呆気にとられた。オーナー息子の逆鱗に触れたのはそこの？自分の所管は業績を伸ばして過

去一を叩き出しているではないか。自分の化学品事業部は売上比率も過去一番の占有率になったではないか。主力の建材部門の低迷を補って余りある成績ではないか。

納得いかなかった。しかし逆らえなかった。外様でありながら役員に登用されたのも、自社株を所有していない社員が入閣したのも前例がなかった。だから逆に切るのも簡単だったわけだ。

あの日の解任劇は今でも心をざわつかせる。それがバネとなって今でも現役に拘る原動力になっている。

同窓会のメンバーに、こんな波乱の人生を送ってきたヤツいるだろうか。

百人いれば、百人のドラマがある。それぞれ違った人生だ。挫折も後悔も、小さな喜びもこの上ない喜びも、みんな経験してきたに違いない。

秋山のその都度味わってきた逡巡と選択が、結局今の自分を作り上げているのだ。

同窓会の会場になっているホテルは実家から十五分だった。それでも早めに駐車場に乗り入れて目立たない場所に入庫した。

自分の車は世田谷ナンバーだ。おそらく他にいない。だから目立たないところに置きたかった。

ここに及んで未だ出席を躊躇っていた。顔が判別できるか自信がなかったので、車の中で確認したかった。気さくに話しかけられる人物が見つけれられるかも気がかりだった。

自分は老けて見えるだろうか。ネガティブな想像がグルグルと前頭葉を刺激する。

するとロビーに最も近いスペースを目指して二台のセダンが連なって停車した。どちらの車も何人かが乗り合わせている。同級生に違いない。ごく普通の服装に見える男性が最初に出て来た。見覚えがある。助手席から出て来たのは男性の奥さんのはずだ。数少ない同級生カップル。噂では二人の間にできた長男が集団暴行の末、一人の外国人労働者を殺害したという。中学生による集団リンチだった。秋山はそのニュースは知らなかったが、しばらく経って母から聞いた。

華やかだった同級生カップルの暮らしぶりは一変した。夫はPTAの会長を辞任し、妻は婦人経営者の会理事をやはり辞職した。それからはひっそりと隠れるように暮らしていたはずだ。

そんな二人が笑顔を浮かべている。時間が暗い過去を忘れさせたということか。髪は後退したが顔の肌艶は衰えていない。妻の方は随分太っている。大学時代、秋山のところに長い手紙を送ってくれたのを覚えている。帝都大学の文学サークルに入っていた、時の人となったミリオンセラー作家と親しくなったことが綴られていた。北国の秋山のアパートを訪ねてみたいとも書いていた。

もう一台には男性二人に女性二人が便乗していた。運転していた男性はベーちゃんこと岡部進君だ。助手席の男性は秋山が最も親しかった黒岩均君だ。北関東の国立大学を出ている秀才だ。

女性たちは誰だかわからなかった。同じ町内だとすればいったい誰だろう。

想像をめぐらしていると窓を叩かれた。心臓が止まるほど驚いた。

芹沢優月が立っていた。

「どうしたの、秋山君」

「ああ、優月ちゃんか。助手席にどうぞ。見つかる」と大変だから」

優月は悪戯っぽい笑顔を浮かべている。

「どうする、秋山君。出る？ 出ない？ 二人だけの同窓会にする？」

田舎の同級生に接触していなかった秋山が、唯一親しく話せるようになった特別な相手。それが優月だった。大学時代から田舎を離れた一人で、彼女もまた故郷を捨てた身だった。

秋山とは事情が違い、彼女は実家の兄夫婦と折り合いがつかなくなっていた。年老いた母を見舞いに

行くにも気を使っているようだ。

コロナで病室に入ることもできず、一時帰宅のときでさえ、実家に行くことは憚られたらしい。

心が沈んでいたとき、秋山のことを思い出した。彼なら、温かい言葉をかけてくれるに違いない。

彼は優月にとっては手元に手練り寄せることのできなかったお日様のような存在だった。

秋山と優月はずーっと違う世界を歩んできた。月と太陽のように、決して同じ世界にいることはなかった。すれ違うときはあつたかも知れないが、見て見ぬふりをしていた。それが今は普通に会えるようになってきている。

「優月ちゃん。出るのはやめた」

「やっぱりね。同窓会なんて柄じゃないもの」

「そうかなあ」

「ふるさととは遠くで見るとでしょ」

「俺たちの土台を作ってくれた土も空気も、そんなには変化しないだろうけど、人は変わってしまったかも知れないものね」

「老いてしまったことを見せたくないじゃない」

「本当は老けた自分を晒したくないだけなんだね、きつと。老いを自覚したくないんだな」

「でも私たちは半世紀の空白を埋めることができた。これって奇跡だよ。学校行ってみない」

「それはごめん」

「じゃあ、夕陽丘のカフェに行こうよ」

「俺たちの出会いにはいい時間帯だな」

決して交わることのなかった二人の人生が、長い年月をかけて近づいていた。

秋の乾いた空気が二人の車を包み込んでいた。

(了)

あとがき

『ひび割れた社長の器』や「水源地」三号所載の『再会』で同じようなシーンが出てきたのはお気づきでしょう。中町礼願の作り上げた人物に巣くっているトラウマなのですね。しかし同級生というのはいいもの。女性は幾つになっても同級生の男性を○君と呼んでいます。面白い習慣ですね。ブログ「談話室」に登場する先輩方の同期の定例会もそんな雰囲気を感じます。同窓のお付き合いを断ってしまった主人公は、一歩踏み出せば交流を再開できる環境にあるのに、それをしないのは偏ったプライドのせいかも知れませんね。

今回、期日を守れなかったうえに一夜漬けの使いまわしの拙文をお届けします。作業を終えたばかりの編集長、関係各位にお詫び申し上げ掲載の可否を委ねることをお許しください。

